



特務機関GWA ZB
V1: Zur besonderen
Verwendung (1976)
K・H・シェール (上
田二郎訳) 早川書房
(文庫) (11/30 刊・¥
300)

恐るべき放射線を発する宇宙の病原菌「ルナリス・ウイルス」が、厳重な警戒下にある軍の細菌研究所から盗まれる。犯人は、大アジア連邦のスパイ——このままでは、世界は確実に破滅する。秘密機関GWA随一の捜査官コンナートは、さっそく行動を起す……。

どこにも明記されていないが、シリーズものの一篇であるらしい。設定は、もうどうしようもなくありふれている。しかし、病原菌をめぐるスパイ・アクションで、結構面白いのでは、と期待して読みはじめた。だが——このウイルスは、ほとんど物語と関係しない。無味乾燥なGWAの説明(FBIの上位に属し、西側世界の平和を守る云々)がくだくだと続いたり、子供だましのオトリ作戦が残り埋めていたりで、かなり失望した。そもそも、シェールが難しい物語を書くはずはなく、軽く読み流せる作品だと思ってはいたけれど、いかんせん軽すぎる。このまま映画化しても、相当低予算ですみそうだ(それそうにないが)。要は、仕掛が単純すぎるのだ。どうせ書くのなら、せめてベリー・ロンドン並のスケールで、ハメを外してほしかった。